学 位 論 文 内 容 の 要 旨

		要　　旨
学位申請者	杉下（齋藤）暁子【論文博士】 （人間発達科学専攻　平成18年3月単位修得退学）	2000 年 4 月の介護保険制度導入により、日本の高齢者福祉は大きな変化を経験した。とりわけ、従来の措置制度に代わり高齢者(あるいはその家族)自身による選択と自己決定、契約によりサービス利用がなされるようになったことの意義は大きい。本論文は、このような背景をふまえ、今日の在宅福祉の主要な柱であるホームヘルプサービスに焦点を当て、サービス利用者(高齢者)と提供者(ホームヘルパー)のサービスに対する認識や期待の諸相を把握するとともに、両者のあいだに認識のずれが生じた場合の調整過程の詳細について解明することを目的とした。その際、高齢者とヘルパーの相互行為に注目するというミクロレベルの関心を中心にしながらも、ヘルパーの所属事業所の組織上の特質(メゾレベル)、介護保険制度の制度的規定(マクロレベル)が及ぼす影響も視野に入れつつ、「ケアの関係性」の多元的な解明を目指したところに本論文の独自性がある。 インタビュー調査は東京のある区において、サービス利用者 12 名、サービス提供者 12 名、サービス提供者の所属事業所 5 か所の管理者もしくは現場責任者 6 名を対象として実施された。本調査では、実際にサービスを授受する高齢者とヘルパーをペアで調査し、さらにそのヘルパーが所属する事業所の管理者等に調査をおこなっており、貴重なデータといえる。 第 1 に、介護サービスを受けることに対する意味づけは、高齢者とヘルパーの間でいくつかの点において異なっていた。例えば、食事介助やおむつ交換などの介護サービスそれ自体に加え、「会話」に代表される人間関係的要素は両者が重視していたものの、高齢者はそれを日常生活の延長線上にあるものとみなしていたのに対し、ヘルパーは介護サービスの提供を円滑に進めるための手段ととらえていた。第 2 に、このような両者の認識の違いも背景としながら、高齢者とヘルパーの間では程度差はあれサービスに対する認識のずれが生じており、それは高齢者もしくはヘルパーのイニシアティブにより調整が図られる場合がある一方で、調整されないまま放置される場合もあった。また、高齢者の要介護度の高低により、調整を要する課題には差異がみられた。第 3 に、ヘルパーのケアに対する考え方や高齢者の意向との調整に対する態度は、かれらの個人属性や高齢者との相互行為の特性のみならず、所属事業所の組織特性によっても左右されていた。介護保険制度施行後に事業参入した NPO 法人などは、行政や社会福祉法人などの旧来型のサービス提供組織に比べ、ヘルパーの裁量的判断の幅をより大きく認めており、メゾ・マクロレベルの要因がミクロレベルの相互行為を規定していた。 本論文は、近年、高齢者介護のみならず子育てや障がい者介助をテーマに隆盛となった「ケアの社会学」に新たな展開をもたらす可能性をもつ研究といえる。
論 文 題 目	ケアの関係性の再考　―高齢者とヘルパーの視点からみるホームヘルプサービス―	
審 査 委 員	（主査）　教　授　　藤　崎　宏　子	
	教　授　　平　岡　公　一	
	准教授　　杉　野　　勇	
	准教授　　小　谷　眞　男	
	准教授　　斎　藤　悦　子	